



研究だより 第48号

第104回
教育研究発表会を
終えて



研究主題

多様な他者と共に、 自ら学びを進める子供の育成(2年次) ～自己調整力を育てる学習の展開～

ごあいさつ

校 長

かたおか もとこ
片岡 元子

副校長

やまじ あきよ
山路 晃代

早春の候、皆様におかれましては、ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。

第104回教育研究発表会を開催したところ、約700名の皆様にご参会いただいたことに、感謝申し上げます。

私たちは、失敗しても、答えを見付けることができなくても諦めず、他者と適切に関わり、自分の目標に向かって自ら学びを進める子供の育成を目指し、日々の授業づくりを追究して参りました。しかし、ご覧いただいた授業は、まだまだ改善の余地もございます。授業討議でいただいた、たくさんのご意見と温かなお言葉を手掛かりに、私たちが思い描いた「自ら学びを進める子供」に少しでも近づけるように、大人も試行錯誤しながら粘り強く取り組んでいきます。

トークセッションでもお世話になりました桃山学院教育大学の木村明憲先生、香川大学の岡田涼先生、指導者及び香川大学の先生方、ご後援いただきました香川県教育委員会、各市町教育委員会、運営等でご協力いただいた保護者及び学生の方々、全ての皆様に御礼申し上げます。

研究の概要

多様な他者と共に、自ら学びを進める子供の育成（2年次）
～自己調整力を育てる学習の展開～

1 研究の背景及び目指す子供の姿について

様々な調査結果を見てみると、外国の子供たちに比べて日本の子供たちは、自分で勉強することに対して消極的であることが分かりました。学びに意義を見いだすことができていないのではないかと考えられます。

そして、コロナ禍において同学年の友達はもちろん、学校を介して関わる異年齢の子供たちや保護者等の大人との関わりがよりよい学びのために大切であることが再認識されました。この多様な他者との関わりの中で自ら学びを進めていける子供を育てたいと考えました。

自らの目標に向かい、問題を発見して、課題を設定し、諦めずに試行錯誤し、
自らの学びを正確に捉え、今後の学習や生活に生かそうとする子供

上記のような子供の姿を実現するために着目したのが、自己調整学習です。自己調整学習では、多くの研究において「意図的に方略を用いて学習に取り組み、その結果から学習過程を調整しようと動機付けられている」姿が目指されています。この姿は、本校が目指す子供の姿と重なります。友達などに関わりながら、子供が自分で学びを進めていくために必要な力を考え、図1にあるように「自己調整力」として設定しました。例えば、学習過程の見通し場面でのどのような課題に取り組むか決める、行動場面で様々な考え方で課題解決に取り組む、といった力です。

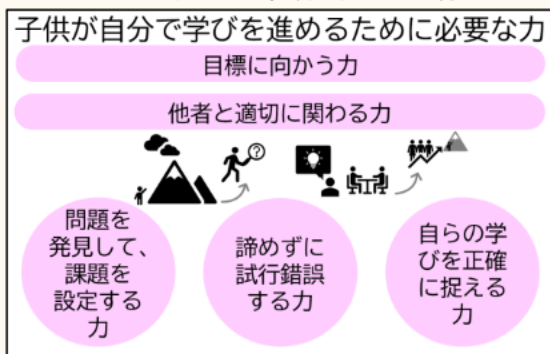


図1 本校が設定した五つの自己調整力

2 自己調整力を育てるために

まずは、子供たちと学ぶ意義や価値を共有すること、学びの過程において子供が課題や解決方法を選択できるようにすることが大切です。そして、自己調整力を発揮する方法を教え、子供が自ら方法を使えるように段々と支援の形を直接的なものから間接的なものに変えていきます。例えば、一つの単元で振り返りの方法を教えた後、別の単元で「どうやって振り返ればよかったかな」などと問いかけて想起を促したり、掲示物を見せて想起できるようにしたりする、といった手立てが考えられます。

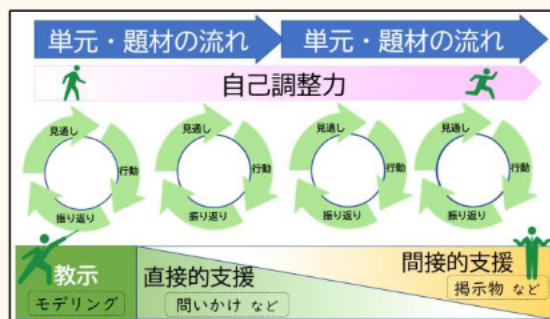


図2 単元・題材構成と自己調整力、手立ての関係

3 1年次研究の成果及び本年度研究の重点

昨年度は、質問紙を開発し、客観的な視点も参考にしながら自己調整力に関する実態を把握する方法を見いだしました。そして、各教科等の学習内容を考慮しながら自己調整力を発揮する方法を様々な設定し、教示や直接的支援、間接的支援によって子供たちが方法を使って学びを進めることができるようにしてきました。また、子供たちの選択の幅を広げるために、課題や解決方法、活動時間等を選べるようにしてきました。

今年度は、昨年度に設定された方法をよりよいものにし、子供たちが方法を使いやすくするための支援などの手立てを考えていきました。

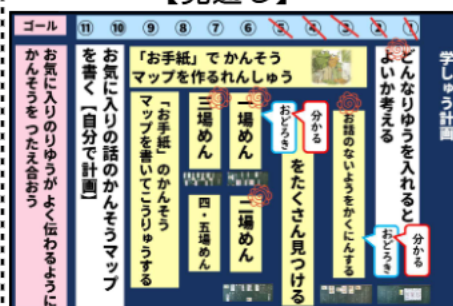
2年国語科 「自分とつないで、お気に入りの理由を詳しく伝えよう ～『お手紙』～」

学習指導者 東 泰右

「がまくんとかえるくん」シリーズのお気に入りの話について感想を書いて伝え合った後、教師の感想のモデルを見た子供たちは、自分たちの感想をレベルアップさせたいという思いをもち、「お気に入りの理由がよく伝わるように感想を伝え合おう」という単元のゴールを設定しました。そして、お気に入りの理由を詳しく伝えるために「分かる（共感）・驚きポイント」を見付けていきました。

4・5場面から「分かる・驚きポイント」をたくさん見付けよう

【見通し】



学習計画を基に、単元のゴールや、その達成に向けて共通教材である「お手紙」から「分かる・驚きポイント」を見付けてきたことを確認しました。本時取り組むべきことを考えながら、必要感のある学習課題を設定しました。

【行動】

これまでの学習で見付けてきた「読みの技」の一覧から、使えそうなものを考え、課題解決の見通しをもちました。そして、「自分と比べる」や「前の場面とつなげる」などの技を用いて、4・5場面から「分かる・驚きポイント」を見付けていきました。交流場面では、「自分なら、『親愛なる』は恥ずかしくて使わないから『驚きポイント』だよ」「僕は、同じところを『分かるポイント』にしたよ。相手が一番の友達ががまくんだからこの言葉を使ったんじゃないかな。かえるくんの気持ちがよく分かったよ」などと、文章の内容と自分の体験を結び付けてもった感想を伝え合いました。



【振り返り】

読みのわざリスト		4/18	4/22	4/23	4/24
1	会話や どのように ちゅうもくする				
2	自分の体で やってみる				
3	どんな じゆんじよて 書かれているか 考える 【せつめい文】				
4	かおや声、ようすなどを そうぞうする 【ものがたり】				

「自分が使えた技をチェックする」という「学びを正確に捉える方法」を想起して、自ら振り返りをはじめました。手元にある「読みの技チェックリスト」の項目を一つ一つ確認して、課題解決のためにどんな読み方ができたかを捉え、自分の成長を見付けていきました。

成果と課題

○これまでの学習の成果である「読みの技」を子供たちが使いこなすことができていた。使えそうな技の見通しをもつことが、正確に振り返ることにもつながっていたのではないかと。また、「分かる・驚きポイント」という観点も分かりやすかった。
▲自分の体験や、それに基づく感想をもっと話したいという子供が多かったように感じたので、全体交流の途中でもペア対話を挟むなど、もっと子供の思いを語らせる時間を取った方が、文章に対するそれぞれの感想が深まったのではないかと。

4年国語科 「学校の魅力を伝えるためのポスターはどちらがよいか意見文を書こう ～『自分ならどちらを選ぶか』～」

学習指導者 小出 早織

来年度のオープンスクールの参加を呼びかける二種類のポスターのうち、どちらがよいか意見を聞きたいという校長先生からの依頼を受けた子供たちは、「どちらのポスターがよいか考えを伝える意見文を書いて、校長先生に伝えよう」という単元のゴールを設定し、学習計画を作成しました。そして、ゴールの達成に向けて粘り強く理由や詳しい説明を吟味し、意見文を書いていきました。

自分の考えと理由や詳しい説明を考えよう

【見通し】



学習計画で前時の学習を振り返り、前時に見いだした次にしたいことを想起しました。そして、ゴールの達成に向けて、本時取り組むべき学習課題は何か必要感をもって決めることができました。

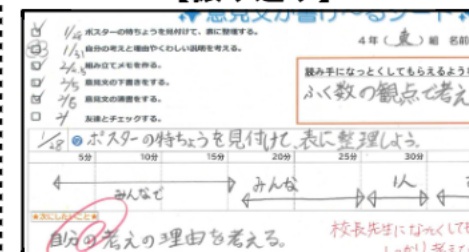
【行動】

教師のモデルを基に、二種類のポスターの特徴を観点ごとにまとめた表を使い、自分はどちらのポスターがよいか決めた後、考えとそれを支えるその理由や詳しい説明をクラゲチャートに整理する方法を確認しました。その際、相手により納得してもらえようような意見文を書くためには、「複数の観点で考える」という諦めずに試行錯誤する方法を



使うとよいことを想起し、活動の見通しをもちました。そして、活動に必要な時間配分を設定した後、「一人で集中して考える」「友達と一緒に考える」といった学習形態を選択し、必要に応じて友達と交流し、助言し合いながら、自分の考えとそれを支える理由や詳しい説明を考えていきました。

【振り返り】



「できたことやまだできていないこと」、「次にしたいこと」について振り返りました。その際に、学習計画表で完了したタスクや本時の活動の時間配分について振り返り、完成までの残りの時間を把握することで、ゴールの達成に向けて次にしたいことを見だし、次時の見通しをもちました。

成果と課題

○二種類のポスターの特徴をまとめた表を基に、どちらのポスターがよいか、自分の考えとそれを支える理由や詳しい説明について「キャッチコピー」や「写真・絵」などの複数の観点で考えることができた。

▲ポスターを見る人の立場でも理由や詳しい説明を考える必要があるのは、校長先生に納得してもらうためであるということ十分に捉えられていない子供がいたので、個人の活動に入る前に全体で確認してもよかったのではないかな。

3年社会科 「坂出市の過去、現在、未来 ～持続可能なまちを目指して～」

学習指導者 網野 未来

市の様子の変り変わりを明らかにするために、交通、土地の使われ方、人口、公共施設の変化を調べていきました。その後、市内の学校の再編計画が進められていることに疑問を抱いた子供たちは、子供や市の立場から再編されることのよさを考え、市が再編を進める理由について考えを深めていきました。さらに、既習事項を基に、市の将来の姿について、考えをまとめていきました。

坂出市では、なぜ四つの学校を一つの学校にすることになったのだろう

【見通し】



前時を振り返り、公共施設ができ、暮らしがよりよくなったことや、学校の数が減っていたことを確認しました。そして再編後の学校の数や位置、児童数を確認した後、市には考えがあって、四つの学校を一つにするのではないかと考えて共有し、本時の課題を設定しました。

【行動】

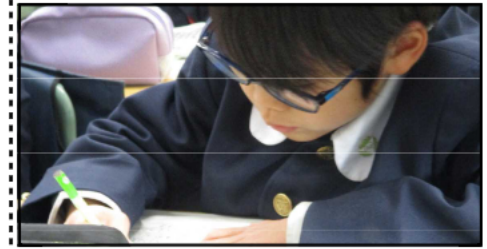
まず、子供たちと市の立場に立って、一つの学校にすることのよさを考えていけばよいことを確認しました。そして、既習事項や友達の考えを参考にしたり、ゲストティーチャーの市役所の方と話したりしながら、



考えていきました。その後全体で、子供たちにとっては、いろいろな子と学校生活を送れることを、市にとっては、学校を維持管理するお金を減らし、税金を他の公共施設のためにも使えることを共有しました。考えたことについては、市役所の方からコメントをいただき、考えを検証しました。様々な立場の人の声を聞きながら学校再編の計画を進めていることに気付くことができました。



【振り返り】



分かったことをまとめた後、一つの学校になることでこれからの子供たちや市のためにつながることを確認しました。自分の学び方（資料を見ること、話すこと、聞くことなど）の何ができたから、分かったことをまとめられたのかという視点で学習過程について振り返りました。

成果と課題

○既習事項を参考にしながら一人で考えたり、友達と話し合いながら考えたり、市役所の方に考えたことを確認したりするなど、各々が自分に合った学び方を選択しながら、自分の納得のいく考えをつくることができた。

▲再編することに納得できない市民の声があることを提示したり、再編することのよさと問題を整理したりした上で、再編の理由を考えていく方が、子供がより強い課題意識をもって、課題解決に取り組めたのではないかと。

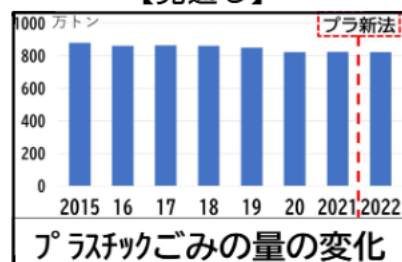
5年社会科 「増え続けるごみ公害から環境を守る ～循環型社会を目指して～」

学習指導者 滝井 康隆

高度経済成長期の日本において、大量のごみが適切に処理されず環境汚染問題が起きていたこと、それを解決するために東京都知事や住民の努力があったことを理解した子供たちは、現代のごみ問題であるプラスチックごみによる環境汚染問題から生活を守るという目標を設定しました。様々な立場の人々による取組について調べ、問題を解決するために必要なことを考えていきました。

なぜプラスチックごみの量は減らないのだろう

【見通し】



前時の学習を振り返り、プラスチックごみを減らすための取組や法律ができたことを想起した後、法律施行の次年度のプラスチックごみの量を確認しました。あまり減っていないことに気付くとともに、認識とのずれを感じ、本時の課題を設定していきました。

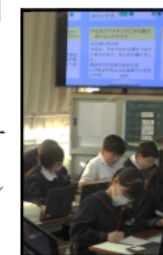
【行動】

どのような立場が関係するかを確認し、それぞれの立場でプラスチックごみが減らない理由を考え、話し合っていました。友達と話し合ったり既習の資料を使ったりしながら、プラスチックごみが減らない理由を様々に考えていきました。全体交流では、四つの立場ごとにプラスチックごみが減らない理由を発表し、それぞれの立場でプラスチックの製造や使用を削減できていないことが指摘されました。そこで、改めてプラスチックを作ったり使ったりし続けてしまう理由を考え話し合っていました。プラスチックを使う方が便利で安いこと、消費者がプラスチック製品を求めていることなど、それぞれの立場の間で協力が出ていないという意見が出されました。



【振り返り】

本時分かったことをまとめた後、まとめに対する感想やまとめを書くことができた理由などについて振り返りを行いました。学習支援アプリに提出された振り返りを大型テレビモニターで確認しながら、教師の「立場を使って考えたので、難しい問題にも取り組むことができたね」という価値付けを聞いたたり、友達の振り返りを見たりして、本時の学びを確認することができました。



成果と課題

○四つの立場を示して、プラスチックごみが減らない理由を考えるようにしたことで、考えやすい立場を選択し自分なりの考えを記述できていた。また、話し合う際にも、どの立場のことかを明確にしながら議論することができていた。
▲四つの立場の中の「行政の立場」を、法律を作って他の三者を規制することができる立場として取り扱うことで、プラスチックごみを取り巻く社会構造をより正確に理解することができたのではないかな。

1年算数科 「数え棒計算クイズを楽しもう ～100までのかずのけいさん～」

学習指導者 井下 修一 ・ 支援員 林 麻衣子

最初の数え棒計算クイズで、(何十) + (何十) という2位数の加法の問題場面に出合い、「どうやって計算の仕方を説明する(答える)といいのかな」という疑問が生まれました。友達と数え棒計算クイズを楽しんだ後、「引き算やばらの数え棒を使ったクイズをやってみよう」などの子供たちの思いを基に、数え棒を使っていろいろなクイズに挑戦しようとする単元の目標を設定しました。

一の位が0でないとき、どうやって答えるといいのかな

【見通し】



前時の学習を振り返った後、単元計画を基に「スペシャル1」に取り組むことを確認し、新たなクイズへの意欲を高めました。教師のクイズを基に立式し、前時の式との違いから本時の課題を設定しました。その後、本時の学習計画を作成しました。

【行動】

これまでに蓄積してきた数え棒や図などの算数アイテムを基に、解決の見通しをもちました。その後、一人で考えるか友達と一緒に考えるかといった学習形態を自己選択しながら、答えとその理由を考えていきました。



そして、学級全体で理由を話し合う中で、クイズを答える際のポイントを確認めました。

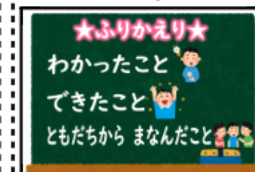
その後、グループごとに数え棒計算クイズを楽しみました。その中で、「十の位と一の位に分ける」や「同じ位どうしを足す」という本時の学びを様々な式で適用し、確かめていきました。

【振り返り】

教師の問いかけで自ら学びを正確に捉える方法を想起し、班で話し合



って一番大切だと思ったことを板書の中から明確にし、板書の該当箇所に班の番号札を位置付けました。そして、振り返りの



視点を選択し、ワークシートに記述しました。

成果と課題

○算数アイテムによって、解決の見通しをもって学習に臨むことができていた。解決方法や学習形態を自己選択し、意欲的に取り組む姿が見られた。正解するためには答えと理由の両方が必要だったことで、理由まで説明しようとしていた。
▲子供が自分たちで学習を進めていくので、教師が個々の学習の状況を見取ることがもっと必要だった。理由を説明する際に、位取り板だけでなく、他の教具も選択して使えるようにしてもよかったのではないかな。

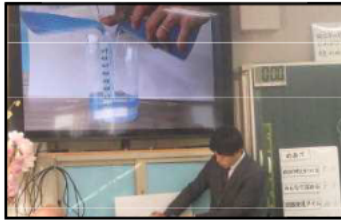
3年算数科 「小数のいいところを見付けよう」

学習指導者 好井 佑馬

端数部分を小数で表すことを知った子供たちは、「分数があるのに、小数は必要なのだろうか」「小数にはどんないいところがあるのだろうか」と、小数のいいところを見付けていくことを単元の目標に設定しました。そして、整数や分数の学習経験を基に、小数の仕組みや大きさの比べ方、計算の仕方を考えていくという学習計画を立て、学習を進めてきました。

小数の足し算はどのように計算できるか考えよう

【見通し】



前時の学習内容を振り返った後、学習計画を基に、小数の足し算について考えることを共通理解しました。本時の問題の答えを実際に水を入れて確かめた後、どうやって計算するとよいのかが分からないことから学習課題を設定しました。そして、時間の使い方を話し合い、計画しました。

【行動】

0.6+0.2の計算の仕方について、これまでに学習した、どの方法を使うとよいかを選択して取り組んでいきました。自分の考えを学習支援アプリで共有し、自由に友達と関わり合いながら、一人一人が考えを明確にしていきました。そして、全体交流の場面では、「小数の計算なのに、どうして6+2で考えられるのか」について考えていきました。0.1が幾つ分で考える方法と、分数に表して、1/10が幾つ分で考える方法の共通点から、数の見方を変えることで、整数の足し算に帰着して考えられることを共通理解していきました。



そして、数値を変えて新たな問題をつくり、解き合っていました。

【振り返り】

『「分かった（できた）こと」や「大切にしたい学び方」について振り返る』という自らの学びを正確に捉える方法を想起して、振り返りカードに記述していきました。その際、これまでに大切にしたい学び方を記録した学び方グラフに印を付け、それを基に振り返っていく姿が見られました。



成果と課題

○主体的に自分の考えをもち、問題をつくって解き合う姿が見られた。また、これまでの算数の授業での自分の学びを蓄積した振り返りカードや学び方グラフを基に、大切にしたい学び方を振り返ることができていた。

▲0.1が幾つ分という考え方について、数直線や言葉とつないだり、0.1のブロックに置き換えて説明したりすることを促すと、理解をより深めることができたのではないかと。

4年理科 「温度による水の大変身 ～水のすがたと温度～」

学習指導者 米谷 直樹

体積変化の学習を基に温め続けた時の水位の変化に注目し、水を沸騰させる実験から問いを見いだした子供たちは、問いを共有し、整理することで「水の温度を大きく変えた時の水の様子の変化を調べよう」という単元の目標を設定しました。そして、水位の変化に関係がありそうな湯気の正体について調べた後、泡の正体についても予想し、実験方法を発想しました。

沸騰させた時に出る泡の正体は何なのだろう

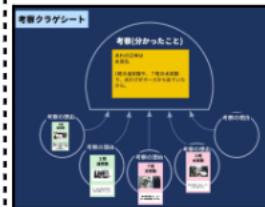
【見通し】

前時の学習を振り返った後、「シャボン玉が割れた時は空気しか出なかったし、プールで潜った時に出てくる泡と似ているから空気だと思う」「湯気の正体は水の粒だったよね。湯気の下には泡があって、泡も湯気と同じと考えた方が納得がいくから水蒸気だと思うよ」などと根拠を明確にしながら予想を発表しました。根拠を交流する中で、課題解決への意欲を高めました。



【行動】

前時に発想した三つの実験(袋に水滴が付くか調べる実験・水が増えるか調べる実験・油と分離するか調べる実験)を想起し、結果の見通しをもちました。さらに、実験の注意点を確認し、どの実験にどれくらい時間をかけるのかを班で計画した後、実験に取りかかりました。実験中は、袋が膨らんだ後に細かな水滴が付く様子をじっくり観察したり、一つの実験結果で満足せず、他の実験に取り組んだりしました。考察場面では、クラゲチャートを用いながら複数の結果を基に自分の考えを見直し、よりよい考察となっているかを確かめました。全体交流では、泡の正体は「水蒸気」と「空気と水蒸気」という考えに分かれ、互いの根拠となる結果を示しながら、より根拠となる結果が多く、妥当だと言える考察はどちらか話し合いました。



【振り返り】

まず、学び方アイテムリストを見ながら、今日できた学び方に印を入れていきました。そして、「たくさんの結果や友達の考えを参考にすると、よく分かりました」などのように、特に意識した学び方を振り返ったり、「次は、より納得できる実験方法を考えたい」などのように、今後したいことを見いだしたりしました。

項目	学び方アイテム	達成状況
1	「水蒸気」は水分子の集まり	達成済
2	「空気」は気体の集まり	達成済
3	「湯気」は水と空気の混合物	達成済
4	「泡」は水と空気の混合物	達成済
5	「水蒸気」は水分子の集まり	達成済
6	「空気」は気体の集まり	達成済
7	「湯気」は水と空気の混合物	達成済
8	「泡」は水と空気の混合物	達成済
9	「水蒸気」は水分子の集まり	達成済
10	「空気」は気体の集まり	達成済
11	「湯気」は水と空気の混合物	達成済
12	「泡」は水と空気の混合物	達成済

項目	学び方アイテム	達成状況
13	「水蒸気」は水分子の集まり	達成済
14	「空気」は気体の集まり	達成済
15	「湯気」は水と空気の混合物	達成済
16	「泡」は水と空気の混合物	達成済
17	「水蒸気」は水分子の集まり	達成済
18	「空気」は気体の集まり	達成済
19	「湯気」は水と空気の混合物	達成済
20	「泡」は水と空気の混合物	達成済
21	「水蒸気」は水分子の集まり	達成済
22	「空気」は気体の集まり	達成済
23	「湯気」は水と空気の混合物	達成済
24	「泡」は水と空気の混合物	達成済

成果と課題

○班全員が納得してから次の実験に取り組むなど、自ら学びを進めながら実験する姿が見られた。クラゲチャートがあったことで複数の結果を基に多面的に考察しやすくなっており、より妥当な考えを導き出そうとする姿が多く見られた。
 ▲袋実験の結果から空気と水蒸気の両方だと考えた子供を納得させる手立てと時間が不十分だった。時間が経過すると袋がしぼんだことに着目させたり、エアープンプ実験と再度比較を促したりするなどの手立てが考えられるのではないかな。

6年理科 「見た目は似ているが性質や働きが違う！ ～水溶液の性質と働き～」

学習指導者 藤川 裕人

5種類の水溶液の性質について学習した子供たちは、酸性雨によって金属が溶けている写真を見て、水溶液の働きに着目し、「5種類の水溶液の働きを調べよう」という目標を設定しました。塩酸は金属を溶かす働きがあることを捉えた後、金属が溶けた塩酸を蒸発させて出てきた物の見た目が変わったことから、元の金属と違うのではないかという問いを見だし、解決方法を発想しました。

塩酸に溶けて出てきた物は元の金属と同じなのだろうか

【見通し】



本単元の目標を確認した後、「金属が粉々になっただけだから同じだと思う」「塩酸に金属を入れた時に泡が出ていて、その泡が金属の性質を奪っているから違うと思う」など、学習課題に対する予想を、生活経験や既習事項を基に伝え合いました。その後、班の友達と「計画・達成シート」に、本時の計画（①取り組む実験②取り組む時間）を立てていきました。

【行動】

「計画・達成シート」に立てた計画を基にそれぞれの班で実験を進めていきました。実験場面では、必要に応じて道具コーナーにある実験材料を自ら選択し、班の友達と協力しながら納得のいくまで実験に取り組みしました。また、学習支援アプリの共有機能を使って他の班の結果を比較したり、実際に聞きに行ったりして、実験方法の妥当性や結果を確かめました。考察場面では、「塩酸に溶けて出てきた物は電気を通さず、金属は電気を通したので、元の金属と違う」「塩酸に溶けて出てきた物は水に溶けて、金属は溶けなかったので、元の金属と違う」など、複数の結果を基に妥当な考えをつくり、伝え合いました。



【振り返り】



教師が伝えた場面の切り替わりをきっかけに、友達と交流したり、「学び方リスト」を参照したりしながら本時のできた（できなかった）学び方と次にしたいことを記述しました。「今までより友達に質問に行ったり、複数の班の結果を基に考察したりすることができた」「粉の正体がはっきりしなかったので調べたい」等、本時の成果や課題、次にしたいことを明確にしました。

成果と課題

○実験方法を工夫したり、時間配分を考えながら問題解決したりするなど、学び方を調整する姿が見られた。振り返りでは、学び方リストにチェックしたことを基に本時の学び方を明確にし、次にしたいことも考えることができた。

▲水溶液の働きに目が向いている児童が少なかった。子供に学びを委ねた分、結果の見通しのもたせ方や実験方法の確認を実験が始まる前により丁寧に確認する必要があったのではないかな。

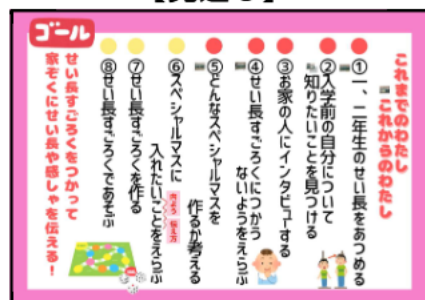
2年生活科 「わたしの成長すごろく ～これまでのわたし これからのわたし～」

学習指導者 増田 洸一

自分の成長や思い出を振り返る中で、家族の多くの支えに気づき、感謝の気持ちをもった子供たちは、「成長すごろくを使って、家族に成長や感謝を伝えよう」という単元のゴールを設定しました。そして、成長や感謝を伝えるために、成長を見せる「見せマス」や感謝を伝える「ありがとうございますマス」などどんなスペシャルマスを作るかを考え、マスの内容や伝え方を選択していきました。

スペシャルマスに入りたいことを選ぼう

【見通し】



学習計画を基に、単元のゴールを確認した後、そのゴールに向けて、前時に考えたスペシャルマスやそのマスを作りたい理由を共有しました。そして、そのマスに合った内容や伝え方を考えたいという思いから学習課題を設定しました。

【行動】

まず、教師のすごろくを例に、スペシャルマスに合う内容を選んだり、成長や感謝の伝え方を考えたりする活動を通して、課題解決につながる技をまとめたチャレンジリストの中で本時使えそうな技を確認しました。その後、必要に応じて友達と交流しながら、スペシャルマスに入りたい内容とその伝え方を考えていきました。伝え方を考える際には、「見せマス」に入りたいブリッジやバスケットボールのシュートなど、できるようになったことを実際にその場で見せる姿がありました。全体やペア交流の場では、選んだ内容だけでなく、その伝え方を実演、説明し、友達から称賛されることで、解決できた達成感を感じ、課題解決の自信をもつことができました。



【振り返り】

教師が伝えた場面の切り替わりをきっかけに、学習課題やチャレンジリストを見返しながら、「できたこととその理由」について、振り返りシートに記述しました。「マスの特徴ごとに内容を友達と仲間分けすると、たくさん入りたい内容が見付かった」「友達に見てもらって、家族に見せたい技の練習ができた」など、できたことだけでなく、解決できた理由も明確にできました。



成果と課題

○何のための学習なのかを一人一人が把握し、課題解決に意欲をもって取り組んでいた。また、チャレンジリストを基に使える技を共有することで、課題解決の見通しをもって取り組むことができ、学びを正確に捉えることにもつながった。
▲「ぴったりなものを選べたか、もう一度見直す」という技を使って選ぶ際、ぴったりという判断基準が明確ではなかった。教師が選んだ理由を問い、エピソードや背景を引き出し、個々の思いを聞く必要があったのではないかな。

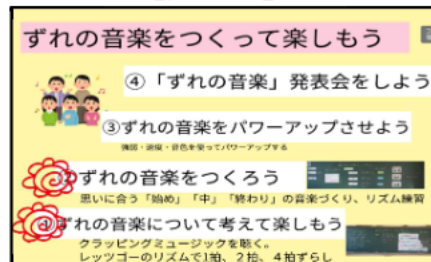
5年音楽科 「ずれの音楽をつくって楽しもう ～『クラッピングミュージック』～」

学習指導者 高口 佳子

二人が同一のリズム・パターンをずらして演奏する「クラッピングミュージック」を鑑賞し、ずれの音楽の面白さを感じ取った子供たちは、実際に『レッツゴー』のリズムを用いてずれの音楽をつくり、発表会をしよう」と題材の目標を設定しました。「始め」「中」「終わり」の三部構成でどんな音楽にしたいか、思いをもち、その思いに近づけるために試行錯誤をしていきました。

ずれの音楽をパワーアップさせよう

【見通し】



題材計画表を見ながら前時の学習を振り返り、より思いに近づけるためには、音楽を特徴付ける要素から「強弱・速度・音色を用いて変化させていくとよい」などと考えたことを想起して音楽づくりへの見通しをもち、「パワーアップさせよう」と本時の課題を設定しました。

【行動】

グループで1台のPCを使い、要素を一覧に表した「思いにつながるカード」を見ながらどの要素から試すか考えました。そして、思いが表現できそうな要素から試し、前につくった音楽と新たに考えた工夫を「音楽づくりシート」

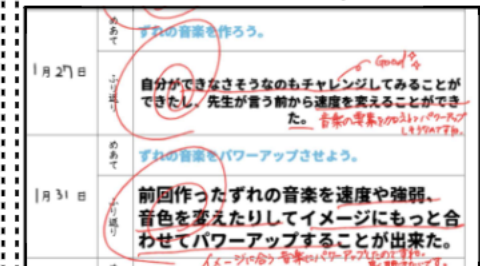


に記入していきました。「速い」という表現に対して、速度の設定に個人差があって合わない場合には、拍を意識してお互いに合わせようと試行錯誤していきました。さらに、前時の録音を聴いて比較し、吟味する中で演奏が変化したことを感じ取り、より思いに近づいていることを実感することができました。



【振り返り】

音楽づくりによる学びを捉えるために題材を通して1枚にした振り返りカードを使用し、学びの積み重ねを確かめていました。自分たちの音楽がパワーアップしたことを振り返るだけでなく、「演奏を聴いてもらいたい」と次時に行う発表会へ意欲を高めることができました。



成果と課題

○「思いにつながるカード」を基に進めたことで、どの要素が思いに合うのかを検討を立てながら音楽づくりができていた。学習支援アプリの録音機能を活用することで、つくった音楽を聴いて比較し、より思いに近づけることができた。
▲グループ内での活動が多かった。他グループと交流して思いに合った音楽になっているかをアドバイスをし合うことで、もっと思いに近づいた音楽になったのではないかな。

4年図画工作科 「ようこそ なりきりミュージアムへ」

学習指導者 毛利 二実子

美術作品を鑑賞し、体全体でその特徴を表すとともに感じ取ったことを伝え合うことの面白さやよさを感じた子供たちは、多様な美術作品に興味をもち、ポーズや表情を真似るだけではなく、そこから感じ取ったことを気持ちまで再現することで、より本物の美術作品に近づくことを共通理解し、「なりきりチェックリスト」を使いながら、試行錯誤をしていきました。

なりきり〇〇（美術作品）に挑戦しよう

【見通し】

前時の学習を振り返り、撮影した写真と美術作品とを比較したり、なりきるために再現しないといけないポイントを整理した「なりきりチェックリスト」を見返したりして、まだできていないポイントをグループで確認した後、「より本物に近づきたい」という思いを高め、「ベストショットを撮影しよう」という目標を明確にしました。



【行動】



グループで1台の端末を使い、「なりきりチェックリスト」を見返しながら、できていないポイントを中心に、拡大した図版を参考にして、撮影する角度や構図を確認したり、体の傾け方を何度も試したり、表情だけを撮影して登場人物の気持ちを改めて想像し直したりと、対話をしながら粘り強くなりきろうとしていきました。撮った再現写真と美術作品を比較して吟味を繰り返し、なりきることで初めに感じ取ったことが変容したり、新たな発見があったりした場合は、「なりきりポイント」を修正したり、追記したりしながらベストショットを目指して撮影を重ねました。



【振り返り】

「三人は同じくらいの年齢だ」と思っていたけど手前の人は少し年寄りだからあまり腰を曲げていなくて、奥の二人に感謝しているよ」などと、本時新たに発見したことを表出し、学びを捉えました。また、写真では見えない角度も動画で撮影することで立体的な作品として鑑賞できることとその面白さに気付きました。そして、「他の作品にもなりきりたい」など、さらに新たな目標を設定しました。



成果と課題

○題材構成の工夫により、子供の意欲が高まっていった。見通し場面で子供たちが目標を明確にもてたので「なりきりチェックリスト」を使い、他者と関わりながら試行錯誤していく姿が見られた。前時との写真の比較で達成感も生まれた。
▲感じ取ったことの原因を語ることができるようにすることで、造形と感じ方をつなげられたのではないかな。また、作者の意図や時代背景などを子供に伝えることでさらに本物に近いなりきりアートを撮影できるのではないかな。

6年家庭科 「冬のほっとエコライフ計画を実践しよう」

学習指導者 笠原 千穂

具体的な場面を想像することで冬の生活の問題を見いだした子供たちは、「学んだことを生かして夏の生活を自分の力でよりよくできた」という成功体験を基に、冬も自分たちの力で快適に、環境に優しく過ごすために「ほっとエコライフ計画」を立て、実践しようという目標を設定しました。そして、実験や調べ学習を通して、よりよい冬の服の着方や住まい方について考えていきました。

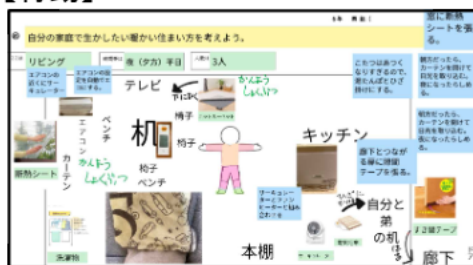
自分の家庭で生かしたい暖かくエコな住まい方を考えよう

【見通し】



学習計画表を見ながら、前時の学習を振り返り、題材のゴールを確認した後、「前回の実験で、暖房機器などの住まい方の工夫ごとの長所や短所が分かったから、今日はそれを生かして自分の家で実践できる住まい方を見付けたい」と目当てを設定しました。

【行動】



いかに、実験結果を基にしたり写真やイラストを組み合わせた
りしながら、よりよい住まい方を吟味しました。考えた工夫
を友達と交流する中で、自分が思いつかなかった視点に気付
いたり、質問やアドバイスをし合
ったりする姿も見られました。また、
交流で得られた考えを自分の見取り
図上に青字で付け加え、学習を通し
た自身の考えの変容が一目で分かる
ようにメモをしていきました。



【振り返り】

始めは、エアコンを「強」で使ったら暖かい大丈夫か！
 と思っていたけれど、メリットデメリットを組み合わせることで、
 暖かい空気を外へ逃がさない工夫をすることで、より一層ECOに過ごしたり、
 電気代が安くなったり、換気で部屋の空の環境まで良くなるのが分かった。
 さんや さんと交流することで、より一層部屋の中の快適さそうなった
 次は家庭で実践するときのよううな事に専念して実践した。

本時の学習を「自分の生活に合わせて、複数の工夫の長所を組み合わせるとよい」とまとめ、「〇さんと交流をして加湿の視点も大切だと気付いた」などと付け加えた考えを参考に振り返りました。その後は実際に自分の家庭で試す工夫を選び、完成したほっとエコライフ計画を実践する意欲を高めていました。



成果と課題

○実験で様々な住まい方の工夫をしっかりと体感し、資料でも様々な工夫について調べられていたことで子供たちが既習内容を自分事として捉え、自分の家庭生活に具体的につないで考える姿が多く見られた。

▲自分の考えが確立してからの交流では、家庭環境がそれぞれ違うので、発表や考えを付け加えるのみで変容は見られないのでは。「迷っているから」「もっとよくしたいから」という段階で交流を行うと、より考えが深まったのではないかと。

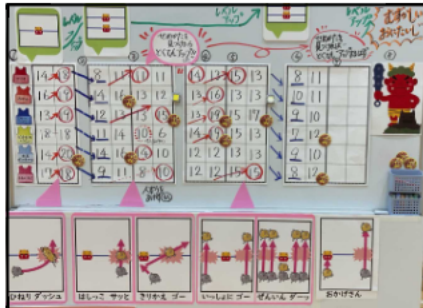
1年体育科 「いざ、大鬼退治！鬼をすり抜け、大鬼のもとへ！ ～ボール運び鬼～」

学習指導者 安岐 美佐子 ・ 支援員 内田 珠世

鬼に捕まらずにすり抜け、ゴールの大鬼に玉を投げて得点する（豆をまく）ゲームでたくさん得点できた子供たちは、ゲームの難易度を上げてもっとたくさん得点できると思いを高め、鬼を増やしたゲームにも挑戦しようと単元の目標を設定しました。鬼が二人、三人と増えたゲームでは、得点する攻め方をどんどん見付けて試し、単元後半には、連携するよさを捉えることができていました。

鬼が三人でもたくさん豆をまく攻め方を見付けよう

【見通し】



補助黒板の得点表から、鬼が三人になり得点が減ったことに気付いた子供たちは、記録と経験を基に攻め方を見付ければ得点を増やすことができそうだと見通しをもち、課題解決の必要性を感じて、意欲を高めていきました。

【行動】

まず、今までに共有した攻め方を蓄積したチームごとの「大鬼退治ボード」で、試そうと思う攻め方をチームの友達と伝え合い、ゲームを行いました。ゲーム後、三番目の鬼を通れずにいる子供の困り感を基に、どんな攻め方をすれば得点できたかを共有しました。三番目の鬼を友達と一緒にすり抜けて得点できた子供が実演して、連携のよさに気付けるようにしました。その後、再度、ボードを使って試そうと思



う攻め方を伝え合い、ゲームを行いました。ゲーム中、仲間の動きをよく見たり、声を掛け合ったりして、連携する姿が見られました。ゲーム後には、得点できた攻め方を確認できるように、自分の色の磁石を置いて、チームの友達と伝え合っていました。

【振り返り】

「一緒に振りカエルタイム」では、ペアの友達と一緒に自分ができたことを振り返りました。得点や「大鬼退治ボード」を手掛かりに、得点できたときの攻め方やチームの友達と連携した動きを話しました。難しいゲームになっても得点できる攻め方を見つけた子供たちは、最後の大鬼退治



に向けて意欲を高めていました。

成果と課題

○子供たちが、ボードを使って考えを伝え合ったり、ゲーム中に声を掛け合ったり、振り返りでボードなどの記録を基にして自分ができたことを捉えるよさを感じていたので、自ら友達と関わりながら活動する姿が見られた。

▲全体共有後のゲーム中や振り返りの際、子供たちが得点できた攻め方を自由に表出させていたが、本時捉えた動きについて、できたか、よかったかなどを確認するとさらに本時押さえた動きを意識できたのではないかな。

5年体育科 「技を高めてチームで魅せろ マットストーリー ～マット運動～」

学習指導者 山口 誉之

広いマットの上で友達と一緒に技をすることの楽しさに気付いた子供たちが、手本となる演技を動画で視聴し、「自分たちも出来る技を増やしてカッコいい演技がしたい」という目標を設定しました。そして、サポートブックや友達の動きを参考にしながら、限られた時間の中で、出来るようになりたい技に挑戦したり、演技構成を工夫したりしていきました。

自分たちの演技をもっとレベルアップさせよう

【見通し】



前時の振り返りとみんなで作った学習計画を見ながら、学習の目当てを確認しました。その後、チームごとに決めた演技を見せたい相手に、カッコいい演技を見せるために本時することを話合いました。

【行動】

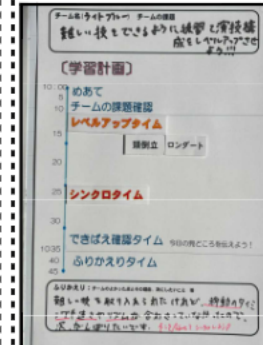
練習内容と時間配分を決めた後、演技をレベルアップさせるためにチームごとに練習を行いました。新しい技を演技の中に取り入れたいチームは、「技上達のサポートブック」や手本の動画を参考に、練習の場を作り変えたり友達同士で見合



ったりしながら習得を目指す技の練習を何度も行いました。演技構成を工夫したいチームは、前回の中間発表会の動画と今の演技を比べて、「演技のサポートブック」を見てチームで話し合ったりして、補助黒板の視点を手がかりに、まだ試していない構成を取り入れながら粘り強く練習に取り組みました。その後、出来栄を確認するために、ペアチームに演技の見どころを伝えて動画を撮ってもらい、見どころについての助言をもらいました。



【振り返り】



チームごとに撮影した動画を見ながら、チームのよかった点とその理由、次にしたいことについて話し

合いました。そして、全体で発表会まであと1時間であることを確認し、チームで目指している演技に近付けるために何が出るかや、本時新たに出てきた課題について共有し、次時への見通しをもちました。

成果と課題

○練習方法や演技構成を「サポートブック」としてまとめ、選べるようにしていたことが、子供たちが自ら考え、粘り強く練習に取り組むのに有効だった。また、そうすることで、教師が苦手な子や困っている子の支援に入る時間が出来た。
 ▲これまでに学習してきた基礎的な動きを毎時間取り入れれば、苦手な子の出来る技がさらに増えたのではないかな。単元で扱う技を精選することで、子供たちが動きを合わせて演技の完成度を上げる時間を確保しやすかったのではないかな。

6年道徳科 「私たちはどう生きるか ～【D：よりよく生きる喜び】『青の洞門』～」

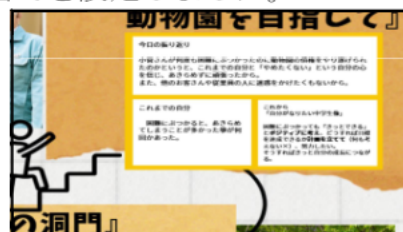
学習指導者 岡根 平

一年間の道徳科の学習を振り返ることで、これまで自分が考えてきた自己の生き方に目を向けた子供たちは、卒業が近付いてきた今、自分はどんな中学生になりたいか考えるという単元のテーマを設定しました。そして、自ら設定した大切にしたい学び方を意識しながら、複数の教材での学習を通して道徳的価値の理解を深め、自分になりたい中学生像について考えていきました。

なぜ、了海は洞門を掘り続けることができたのだろうか

【見通し】

前時の学習を振り返り、単元のテーマを確認した後、本時扱う内容項目について確認し、今日の学習を行う目的を確かめました。その後、本文の叙述や実際の洞門の長さから、自分が了海だったら同じようにできるか考え、なぜ了海は洞門を掘り続けることができたのかという目当てを設定しました。

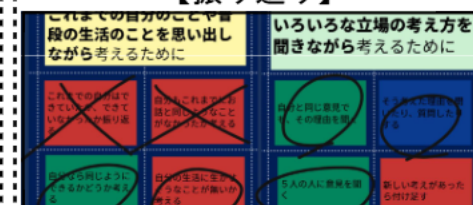


【行動】

了海が洞門を掘り続けられた一番の理由を学習支援アプリ上に記述し、友達と考えを交流しながら、自分たちで意見を分類しました。友達の意見を一覧しながら自分が大切にしたい学び方を意識し、なぜそれが一番だと思ったのか互いの考えを聞き合いました。全体交流では、「自分に関係のない場所の人々なのに」「助けてくれた人に任せてはだめなのか」とその時の心情についてさらに考えを深めていきました。その後「了海はどんな自分でありたかったのだろう」という問いに対して、自分のしたことを受け止める自分、命をかけてでもやるべきことを見付け、やり遂げる自分など、了海から感じた思いについて、自分の言葉でまとめました。



【振り返り】



教師が伝えた場面の切り替わりをきっかけに、本時の学習を通して大切だと感じたことや、自分になりたい中学生像について各自でワークシートを選び、振り返りました。その後は、各自が大切にしたい学び方を設定した学び方チェックシートを使い、学習への取り組み方について、自己評価しました。

成果と課題

○マイスタディログを使うことで、学習への取り組み方を意識することができ、次の学習へ生かすことができていた。単元を通したテーマを設定し、複数教材から迫ることで、これからの自己の生き方についての考えを深めることができた。
▲了海的心情に絞って考えていたが、実之助の立場からも考えることで、「よりよく生きる喜び」の捉えが広がったのではない。また、なりたい中学生像や、授業前後で考えがどのように変容したのかを交流してもよかったのではない。

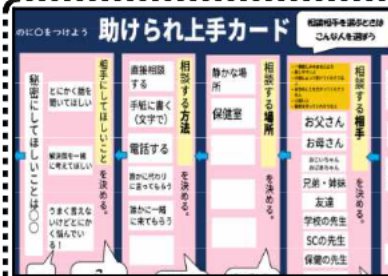
援助要請ができる子供の育成 ～養護教諭の視点から～

提案者 井上 さくら

変化の激しい社会を生き抜いていくために、誰かに助けを求めたり相談したりする「援助要請」の力が必要になってきています。子供たちが相談のよさを感じながら生活に生かしていくために、相談の方法を知り、自分に合った方法を試していくことができるようになるための授業実践と、受容的な関わりや関係づくりを行いながら援助要請の視点を意識した保健室経営を行いました。

実践事例「助けられ上手になろう」「助け上手になろう」(第5学年)

援助要請を引き出すための保健室での関わりと工夫の実際

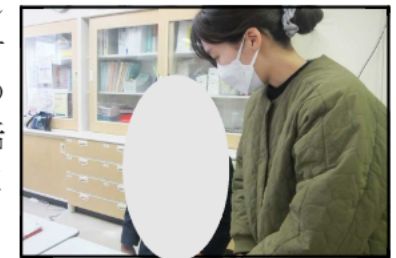


「助けられ上手になろう」では、三つのこつである「相談相手を決める」「相談方法を決める」「相談相手にしてほしいことを決める」について、具体例を共有しながら自分に合った相手や方法を選んでいきました。

学級の実態に応じて作成した「助けられ上手カード」を使ったロールプレイでは、自分に合った方法を知り、試すことで相談のよさを感じることができていました。「助け上手になろう」では、気付く力と聞く力を高めるために、イラストの中から困っている人を探したり、聞き方のロールプレイを行ったりしました。助け上手とは、相手の思いを受け止めながら聞くことができる人であることを知り、養護教諭が話を聞く時に心掛けていることを聞き、体験することで、自分にできそうな聞き方を見付けていました。



援助要請ができる子供たちを育成するためには、相談を促すだけでなく、子供たちが相談したいと思った時に相談できるような環境を整えておくことや関わり方が大切です。「助けて」と声を上げることが難しい子供たちの声を聞き、気持ちを汲み取るための関わりを行いました。例えば、自分の気持ちを整理して話すことが苦手な子供には、話の内容を紙に書き起こし、視覚的に整理することで、「話を聞いてくれた」と感じられるようにし、相談のよさにつなげられるようにしました。また、本音を言うことが苦手な子供には、面と向かって話すのではなく、折り紙を折りながらなどの「ながらの会話」をしたり、自分から話をするのが苦手な子供には、教師の方から嬉しかった話や失敗談などを話したりするようにしました。いろいろな人の考えに触れながら安心して自分の話をするように関わりました。



成果とこれからの課題

○ロールプレイの時間を多く取り入れたことで、自分が困った時に助けを求める方法を知るだけでなく、助ける立場になったときにどのように接すればよいかを体験する機会を保障することができた。

▲自分の問題なのに、主体的に解決していくことに課題がある子供もいる。そのような子供には話を聞くだけでなく、自分で解決方法を考える時間を多く設定するなど、本人の解決する力をサポートする声かけや関わりも必要ではないか。

トークセッション

「多様な他者と共に、自ら学びを進める子供の育成」について語り合う

桃山学院教育大学准教授

きむら
木村

あきのり
明憲 先生



香川大学准教授

おかだ りょう

岡田 涼 先生



自己調整学習について

学校教育は、子供たちの社会や未来をつくる仕事だと思っています。調整できるということは、自分で学習（仕事）を進められるということで、面白く、楽しいことだと思っています。そのことが人生を豊かにして幸せになることに繋がると考えています。

自己調整学習では、予見、遂行、自己省察のサイクルを回していくことが大事です。そのために、動機づけ、学習方略、メタ認知の力が必要になります。授業の中でどのように実現していくか、具体的に何をするかを考えることに研究の意義があります。

授業実践を基にした本研究の価値について

社会科の授業では、これまで学習計画を立てる経験を積み重ねてきたことで、自分たちの力量が分かって計画の立案ができていました。すごく大事だと思います。また、難しいことを考える際には、立場を変えろという見方・考え方の指導を行っていました。これは、視点を設定し多面的に考えるという思考スキルを教えているということです。このような指導が、自己調整しながら教科の内容を深めることに繋がっています。繰り返し繰り返し行っていくことで、方略が身に付き、学習を主体的に進めていくことができますようになります。

自己調整学習の理論と

見直す	課題	目標	計画	実践
見直す	課題	課題理解	課題を分解していたか	実践
		課題興味	課題に興味を示していたか	
見直す	目標	目標設定	問いを広げていたか	
		目標志向	目標がどのような能力を	
見直す	計画	結果予測	学習の最後に振り返り	
		計画立案	学習活動を決めていたか	
見直す	実践	自己効力	学習をうまく実行するか	
		実行意欲	課題・目標を達成してい	
見直す	実践	自己指導	自分に質問するようにし	
		自己評価	自己評価を高めるようにし	

体育科の授業では、諦めずに試行錯誤する方法について「まだ試していない方法を試す」というように教科に置き換えて具体的に考えられていました。大事だと思ったことは、これまで学んできた学び方を子供たちが納得し、他の単元でも使っていこうとなったところだと思います。また、子供が自分の中で調整する場をつくることも大切です。自分一人で考えても、交流してもよいと取り組み方を選択できるようになっていました。人によってひらめくタイミングが違うので、自分が納得いくまで考えられる場を作る必要があります。

自己調整学習を支えるために

- ①自己調整を支える要素を鍛える
—動機づけ、学習方略、メタ認知
- ②自己調整が必要となる場を作る
—試行錯誤、方略の工夫、変化の自覚
- ③自己調整している姿を見取る
—形成的評価、自己調整のガイド

学年や発達段階における自己調整学習の進め方について

学習計画を立てることが自己調整学習のまず一歩だと思います。課題を基に目標を立て、振り返りを行うセットから始めると良いと思います。学習活動とその時間配分を示すと、どのように学習が進むかが分かり、計画を立てやすくなると思います。

自己調整学習は学術的に出てきて、現場で具体的に試そうとしているのが全国の動きです。メタ認知や動機づけでも、発達段階に応じた特徴があります。それを踏まえて、教科の特性と発達段階の両面で方略を考えていくことが大切だと思います。

今後の教育の在り方について

「限られた時間の中で最高のパフォーマンスを」ということが重要だと考えています。時間は生きていく中で大切なリソースです。没頭しながらも、調整のきっかけを教師が与え、子供がメタ認知するきっかけをつくることで、少しずつ効率よく学んでいけるようになると思います。

時間のことは難しいですが、45分からの脱出も大切だと思います。内発的動機づけの観点からすると、没頭・熱中している姿は非常に尊いものだと思います。環境や自分がいるところ自体を変えていこうとする取組もあるので、自己調整学習と教科内容との折り合いを考えていきたいと思っています。

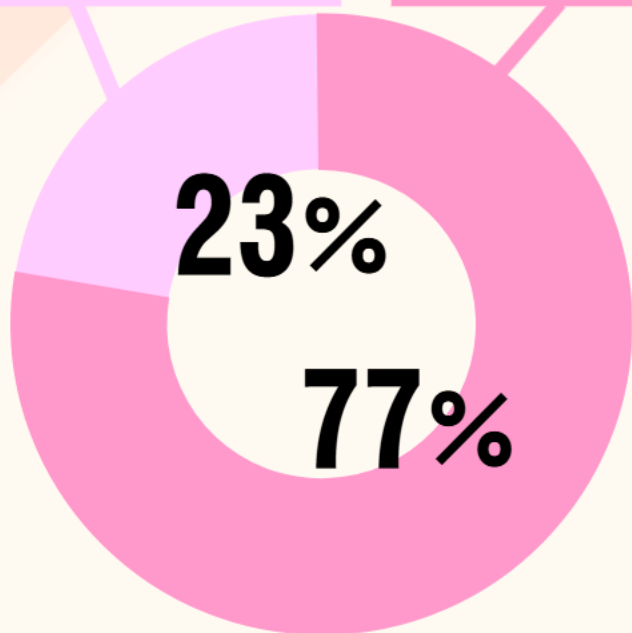
ご参会の皆様より

自己調整力に焦点を当てた本校の研究について、北は北海道から南は沖縄県まで、たくさんの地域からお越しいただき、150件近い回答をいただきました。皆様からのご意見を基に、来年度からの研究をさらによりよいものにできるよう、本校職員一同、取り組んで参りたいと思います。以下にその一部をお示しいたします。

本校の研究理論、具体的方策について

まあまあ参考になった

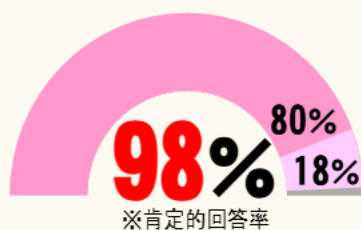
参考になった



- ・自己調整力が身に付いた子供は将来、仕事や一日の過ごし方等、目標に対して計画的に取り組めるようになって感じ、とても意義のある研究だと思った。（島根県・教諭）
- ・「自己調整」という言葉に興味はあったが、具体的な実践の方法が分からなかった。理論と実践の両方を見せていただき、来てよかった。（兵庫県・教諭）
- ・見通しをもたせることが大切だと感じた。まずは授業や単元の見通しを共有することから始めたい。（香川県・教諭）
- ・「自己調整力」について分かりやすく説明してくれていた。また、どの先生もその理論を踏まえ、一貫した授業づくりをされていたのが素晴らしいと感じた。（愛媛県・教諭）
- ・本市でも、自己調整学習を取り入れた教育課程の開発に力を入れている。その中で、大変参考になることばかりだった。すべての先生が同じ方向を向いて取り組まれていることに感銘を受けた。（大分県・指導主事）

- ・今後の子供たちの学びの在り方を考えていく上で大変参考になった。授業者の大切にしたいことがよく伝わる授業を見ることができ、遠方から参加してよかった。（広島県・教諭）
- ・自分が学びをコントロールする力をもって、学習することこそが、社会で生き抜くために大切であると感じている。そのためにはそもそもの学ぶ基盤や意欲が無いと難しいものであると感じていたが、今回参加することで、それを乗り越えるためのヒントを見せてもらうことができた。（香川県・教諭）

提案授業・授業討議について



- ・どうしても知識を増やす方向に授業が進んで行きそうな領域だと悩んでいた中で、どうすれば子供が進めていく展開になるか大変勉強になった。（香川県・教諭）
- ・子供たちが取り組みたくなる環境や教具、場の工夫がたくさん見られ、自分の関わりに活かしていきたいと思うことがたくさんあった。（愛媛県・教諭）
- ・付けたい力を明確にし、それができたかを自分で振り返っている点がよかった。繰り返すことで定着するのだと感じた。（香川県・指導教諭）

トークセッションのご感想

- ・学年の発達段階の違いに合わせた学習の進め方や、自己調整させる方法を取り入れたいと思った。低学年にはハードルが高いと思っていたが、課題設定を一緒に行うことや、学び方も振り返っていくことなど、できることから始めていきたい。（富山県・教諭）
- ・「普段と大きく違うことをやる必要はない。その方法を子供は納得しているかどうか」という言葉が印象に残った。子供の「やりたい！」を大切に授業の流れを生み出していきたい。（広島県・教諭）
- ・子供たちが自分で学習の環境を作っていくことがこれから求められていると感じた。自己調整学習の概念をしつかりと言語化すること、子供たちにその意義を伝えていくことが大切だと思った。（香川県・教諭）
- ・自己調整学習に必要な要素（学習方略や動機付けなど）を教えていただき、何を考えて授業づくりをすればいいか明確になり、自己調整のイメージが変わった。ぜひ取り組んでいきたい。（香川県・教諭）

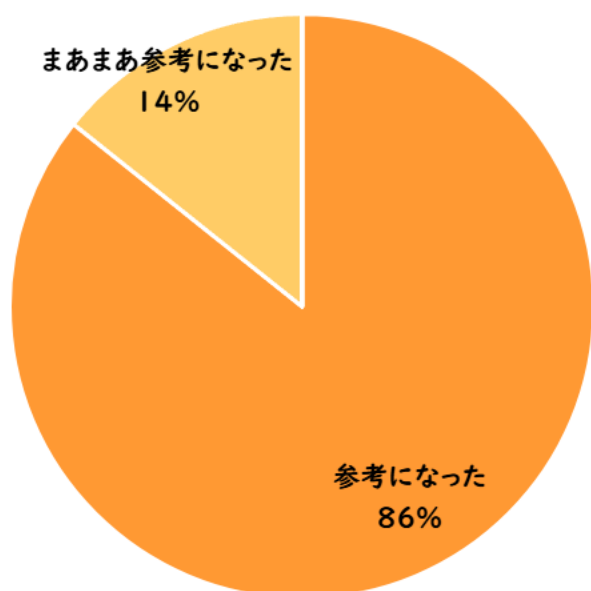
わくわく授業づくりワークショップ

本年度は、対面とオンラインを併用しながら、年間4回のワークショップを実施いたしました。全国から延べ108名が参加してくださりました。学校関係者や教職を目指す学生の皆様方と子供がときめく学びのつくり方について一緒に考えることができました。

開催日	内容	人数
4/26	①教師と子供、子供同士を“つなぐ”教師の手立て 第一部：学級経営について 第二部：運動会について	23名
7/26	②自己調整力を育む授業づくり	40名
7/30	③音楽科&体育科&夏休み明けの子供たちの心のケア	17名
8/2	④家庭科&図画工作科&夏休み明けの子供たちの心のケア	28名

ワークショップに参加された方の声をまとめました。

1、ワークショップは参考になりましたか。 2、1の回答の理由について教えてください。



- 参考になった
- まあまあ参考になった
- あまり参考にならなかった
- 参考にならなかった



ワークショップ①でのご意見

学期初めにありがちな悩みについて取り扱ってくださったので、とても参考になった。

ワークショップ②でのご意見

自己調整力を育む授業づくりの工夫について、具体的な実践の紹介があり、とても参考になった。
教材研究の際に、どんな手立てで、どんな課題意識をもたせて学ばせるかを考えることができた。

ワークショップ③でのご意見

実際にゲームをしながら、全ての子供が主体的に取り組める教材や単元構成を考えることができた。

ワークショップ④でのご意見

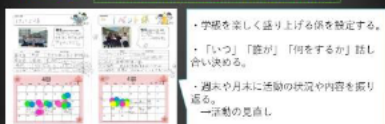
実際に作品を作ることで、子供の気持ちや教師の手立ての両方を考えることができた。
今後は些細なことでも教員間で情報共有し、子供たちにとってよりよい環境を整えていきたい。

以上のような肯定的な回答を多数いただきました。今後も、体験的で、明日の授業で使えるような内容について提案して参りたいと思います。次頁以降で、各回の取組について紹介します。

「つなぐ」をテーマに、第一部は学級経営について、本校教員が実践している温かい風土づくりや係・当番の運営について紹介したり、参加者の皆様の困っていることについて話し合ったりする時間を設けました。また、第二部では、運動会について、目的意識のめたせ方や表現指導のポイント、振り付けのアイデアなどを楽しく動きながら一緒に考えました。

2 係・当番の運営の仕方

中学年 自分の得意を生かした活動



- ◆得意だからこそ、主体的に取り組める。
→ 子供たちの自己肯定感が高まる。
- ◆もっと工夫してみようという意欲が高まる。
→ 創意工夫



参加者の声



4月当初の当番決めでは、どうしても教師主体になってしまう場面が多かったので、1年生でもこんなに主体的に動けることに驚きました。中学年でも生かせることがたくさんあったので、他の教員に伝えて学校全体で取り組んでいきたいです。



運動会の表現の工夫の仕方や子供と一緒に考えることの大切さが改めて分かりました。子供が楽しく表現できるように教師自身も楽しみながら練習していこうと思います。

7月26日（金） 自己調整力を育む授業づくり

本校で研究している自己調整力やそれを育むための手立てについて紹介しました。子供が自ら選択して、学びを進める時間を設定する際のポイントや、自己調整力を発揮する方法を習得できるようにするための手立てなど、本校での実践例を基に、具体的な取組を共有しました。また、自己調整学習と教科の資質・能力の育成をどのように両立させるのかなど、先生方が感じている疑問について一緒に考えました。

3 学習過程の全場面にわたる二つの力を育てるために

○単元・題材構成の工夫

②子供が自ら選択して、学びを進める時間の設定

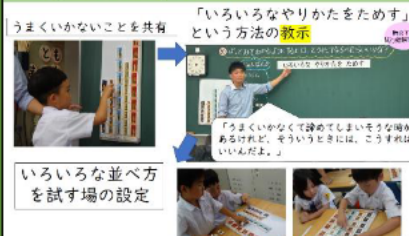
自分が学びの主体であることを
実感できるように

ポイント

- 学習の目標を達成できる選択肢（課題や解決方法、活動時間）を設定する
- 選択の妥当性を高められるようにする

4 学習過程の特定の場面にわたる三つの力を育てるために

第1学年算数科「ばつと見て割合が分かるように並べよう ～かずしらべ～」



参加者の声



自己調整力を育てることで、見方や考え方を変えながら諦めずに取り組む子供になってほしいです。自分はまだ教員歴は浅いですが、教師主導の一方的な授業ではなく、子供自身が学ぶ主体となる授業づくりを2学期から意識していきたいと思いました。



自己調整力を伸ばすためにどのような活動をすればよいのか、教員はどのように関わればよいのか、悩んでいたポイントについて知ることができました。

7月30日（火） 音楽科&体育科&夏休み明けの子供たちの心のケア

第3回の第一部は、実技指導の方法について体験しながら考えました。音楽科では、「現場ですぐに使える」をテーマに学習支援アプリやソフトを紹介し、実際に音楽づくりを行いました。体育科では、全ての子供が参加できる授業づくりを目指して、活動しながらルールや用具の工夫について考えました。第二部は、夏休み明けの子供たちの心のケアについて、子供の見取りのこつや養護教諭と担任の連携の仕方を考えました。



参加者の声



曲の変化に気付かせるために、CDだと速さを変えられずピアノを弾くという方法しかありませんでした。そうすると、子供への細かい指導ができないので、曲の速さを変える学習アプリ等を知れてよかったです。ぜひ活用したいと思います。



実際に動きながら、子供たちがつまずくポイントを確認する時間（教材研究する時間）は大切だと感じました。用具も特別なものではなく、あるもので工夫できることにも気付きました。

8月2日（金） 家庭科&図画工作科&夏休み明けの子供たちの心のケア

第4回も引き続き実技指導を体験しながら考えました。家庭科ではミシンを用いて、ナップサックや製作の手順の分かる見本を実際に作りました。図画工作科は、電動系のこぎりをを使った立体作品の製作を通して、用具の安全な使い方を確認しながら、製作の楽しさを共有するとともに、子供のつまずきや支援のあり方などを一緒に考えました。また、第3回と同様に夏休み明けの子供たちの様子を見取りについて考えました。



参加者の声



実際に電動系のこぎりを体験することで、子供の目線、先生の目線で考えることができました。先生の見本で「できそう」「やってみたい」という子供の思考が一気に広がると感じました。



子供のちょっとした変化に気付く手がかりとして、給食の量に注意することや「ながらコミュニケーション」が、かえって本音を引き出せるということが参考になりました。

成果と今後の方向性

昨年度より、「多様な他者と共に、自ら学びを進める子供」を育てるために、授業で子供たちが自己調整力を発揮し、自己調整する方法を習得できるように研究を進めて参りました。「見通し場面」「行動場面」「振り返り場面」の学習過程や、その過程における自己調整力を発揮する方法を教師だけでなく、子供自身が意識して学習する様子が見られるようになってきました。

そして、教育研究発表会では、子供たちが時間の使い方を考えて、学習の進め方を計画したり、解決方法を選択して、粘り強く友達と話し合いながら学習に取り組んだり、自分の学習の取り組み方や成果を振り返って、次の学習へ意欲を高めたりする姿を見ていただくことができました。

授業討議やアンケートなどでいただいた皆様方のご意見を基に、私たちのこれまでの取組を振り返ってみますと、このような子供たちの姿は、学校全体として、子供の自律性を尊重するという考えや育成を目指す自己調整力を共通理解し、子供たちの支援を粘り強く行ってきたことによる成果だと感じています。どの学年や教科においても、五つの自己調整力を大切に、教師が子供を動かそうとするのではなく、子供が自分で動き出せるように支援を行うことを大切にしてきました。その他にも、数多くのご示唆をいただき、ありがとうございました。

これまでの研究を通して、自己調整力はすぐに大きな成果が得られるものではなく、長い時間をかけて子供たちに培っていくものだという実感できました。今後も多様な他者と関わり合いながら、自分の学びを進めていける子供を育てていきたいと思ひます。そのためには、子供たち一人一人が自身の学び方や成果をより正確に捉え、学び方を習得していくことが大切です。これからも、子供たちが関わる環境の一つである教師にできることを考えていきたいと思ひます。



あとがき

教 頭 ふじい やすひろ
藤井 康裕

本年度は、「多様な他者と共に、自ら学びを進める子供の育成（2年次）」を研究主題として、自己調整力に焦点を当て、子供一人一人が自ら学びを進めていく姿を目指して授業づくりを行って参りました。教育研究発表会では、会場の都合により、ご参会の皆様にご不便をおかけすることとなり、大変恐縮しております。開催に際して、たくさんの方々から温かいご支援や励ましの言葉をいただき、職員が一丸となって教育研究発表会のために邁進することができました。本当にありがとうございました。また、ご参会いただいた県内外の関係諸機関の皆様には、様々な立場から貴重なご意見をいただけたことに対し、職員一同心より感謝申し上げます。

次年度は教育研究発表会のない年となります。日常の研究授業及び討議を公開したり、授業づくりワークショップを開催したりして、さらに公立校の先生方に貢献できる研究を目指して参ります。今後とも、ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

編集委員

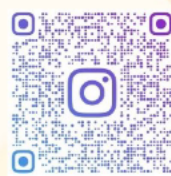
滝井 康隆 好井 佑馬
米谷 直樹 東 泰右
岡根 平 井下 修一
藤川 裕人

香川大学教育学部附属坂出小学校

〒762-0031 香川県坂出市文京町二丁目4番2号
TEL:0877-46-2692 FAX:0877-46-5218
E-mail:sakaide-1@kagawa-u.ac.jp



【本校 HP】



【本校 Instagram】

過去の指導案や、研究の歩み、
日々の実践の様子をご覧いただけます。